

はじめに

社会力とは何か、そのことを考える前提として、公共事業について、少しお話をしたいと思えます。イギリスの経済学者、アダム・スミスは「諸国民の富」（一七七六年）という歴史的名著を著しています。その第五編に「政府の義務経費」について、彼の考えが詳細に述べられています。政府が義務的に予算化しなければならない経費として、彼は①防衛費、②公共事業費、そして③司法費を取り上げています。①の防衛費ですが、国がゆたかになると、隣国との争いが絶えないため、防衛費が必要だということです。③の司法費は、アダム・スミスが生きていた一八世紀では、訴訟にかかる経費は、訴訟を起こす市民の負担となっていました。政府はこの経費を、主な収入源のひとつとしていたのです。そのため、経費を負担できない市民は訴訟を起こすことができなかったのです。これでは社会的正義を実現することができないとして、訴訟にかかる経費は、政府が負担すべきだと考えたのです。

問題は、②の公共事業費です。公共事業とは、社会的にその有用性が認められていながらも、個人、あるいは複数の個人では費用をまかなうことのできない事業を意味しています。具体的には、道路、橋梁、運河などの交通システムです。交通システムを整備することで、ヒトやモノの

往来が自由になり、市場が拡大します。アダム・スミスはこの費用を政府が負担すべきだと考えたのです。

この考えを整理すると、政府が行う公共事業によって地域社会の活性化がすすみ、市民生活がゆたかになるという関係が成立します。ここでの市民は市民個人というよりも、家族を指していると思つてください。なぜなら、アダム・スミスの時代にあつては、たしかに大きな工場が出現し始めていますが、他方で農業は家族単位で生産を行つており、さらに工業生産も家内工業というシステムをとつていました。その結果、政府と市民、というより政府と家族は地域の交通システムを整備する公共事業によって結ばれていたのです。

しかし、今日問題になつてきているのは、地域の崩壊、家族の崩壊です。アダム・スミスの時代の政府は地域⇩家族⇩個人という流れのなかで、今日はその中間項にある地域と家族の崩壊が著しくなつていきます。地域では過疎化、高齢化がすすみ、他方、家族は個人化し、家族という存在そのものが危機にあります。政府⇩地域⇩家族⇩個人という関係が、中間項の地域と家族が欠落してしまい、政府⇩個人関係として、政府と個人が直接向き合う時代になつていきます。

家族には家族としての役割がありました。育児、介護、教育、生産も含め、生活に必要なサポートは家族、それも大家族の中で充足されてきたのです。地域もそうです。生産と消費は、現在でいう地産地消に近い形態をとつて、それなりに自立していました。しかし、家族が崩壊してしまつた以上、家族が担っていた、介護、育児、家庭教育といった機能を地域で担う必要が生まれてき

ました。保育所の増設、介護施設の増設、学童保育の拡大などです。

しかし残念なことに、家庭機能を代替する地域そのものが過疎化と高齢化、そして少子化を経験し始めています。その結果、たとえば年金、介護保険などのサービスを受けるにあたって、政府と市民の直接的な関係が必要となつてきています。

しかし政府は、これらの地域の面倒をみるには、組織として大きすぎるのです。そこで必要とされるのが地域の再生であり、それを担う力こそ社会力です。公共事業は、社会的に必要性が認められているにもかかわらず、個人ではその費用負担に耐えかねる事業を指していました。と同時に、公共事業によって地域はそれなりに潤つていたのです。

その例に倣つていえば、社会力は、社会的に必要と認められているし、また地域や家族はそれを充足する能力があるといえます。その意味で、公共事業とは異なり、意思ある個人が努力すれば回復することのできる力なのです。個人が意思をもてば回復することができる力、この点を十分念頭におく必要があります。

企業の派遣切りによつて多くのホームレスが生まれた二〇〇八年末、市民の力によつて派遣村が設営されました。このように、個人の力をもう一度、再構築して地域を再生するための社会力を創りあげていく必要があるのです。そのことを問題にして、この本のタイトルは「社会力の市民的創造」となつていきます。地域の再生は、個人、個人の力を社会という広がり結びつけ、社会力として創造することで果たされるのです。個人の力で、社会力は創造できるのです。具体的

な内容は本論で触れるとして、みなさんも一人ひとりで社会力を身につける方法を、わたしと一緒に考えてみることにしましょう。

二〇一〇年八月一日

藪野 祐三